

高知県・高知市立高知商業高校

主体的な進路意識の醸成

生徒に高い目標を抱かせる 指導を学校全体で推進し、 自己実現に挑む意欲を育む

変革のステップ

背景と課題

- 4年制大学への進学を目指す生徒が増える中、希望進路に応じた進路指導に課題があった

実践内容

- 教師間の目線合わせを徹底** 学校経営ビジョンや重点教育計画を策定し、さらに、学校が育成を目指す資質・能力を「市商（*1）マネジメント力」として整理し、教師間の目線合わせをしっかりと行う
- 「国公立大学対策講座」の開設** 国公立大学への進学を志望する3年生を対象にした「国公立大学対策講座」を開設し、高い目標を抱く生徒同士が刺激し合える環境を整備
- 特別活動で成功体験を積ませる** 特別活動を通して、生徒に「やればできる」という自信をつけさせ、高い目標に挑戦しようとする進路意識を醸成

成果と展望

- 自分の進みたい道を選択する生徒が目立つようになり、国公立大学進学者も増加
- 教科指導・進路指導と特別活動の有機的つながりを強化することが、今後の課題

PROFILE



旧制・高知市簡易商業学校として開校。校是に「報本反始（ほうほんはんし）」を掲げる。「経済人として信頼と信用を得ることができる能力」「国際人としての視野」を備え、地域の産業・文化に貢献する人材の育成を目指している。

設立	1898（明治31）年
形態	全日制・定時制／総合マネジメント科・社会マネジメント科・情報マネジメント科・スポーツマネジメント科／共学

生徒数 1学年約280人

2018年度進路実績（現役のみ） 国公立大は、筑波大、岡山大、高知大、高知県立大などに27人が合格。私立大は、同志社大、立命館大などに延べ113人が合格。短大、専門学校進学91人。就職45人。

住所 〒780-0947 高知県高知市大谷6

電話 088-844-0267

Web site <http://www.kochinet.ed.jp/kochisho-h/>

「進学にも就職にも強い学校」を目指し、全校体制で指導改善を図る

高知県・高知市立高知商業高校は、4学科から成る学校だ。1990年代に始まった地域の経済不況の影響により、高卒者の就職が厳しくなっていく中、同校では次第に4年制大学への進学を目指す生徒が増加し始め、生徒の多様な志望に応じた指導体制を整えることが課題となっていた。また、生徒が自信を持ち、本当に進みたい道を選択できるよう、後押しも必要だった。そこで、学校が一丸となり、進路意識の醸成や学力向上を中心とする指導改善を図ることとした。岡崎伸二校長は、次のように語る。

「社会の変化とともに、学校に求められる

*1 同校の略称。

教育は変わります。本校では、地域社会における即戦力の養成に従来通り力を入れながら、上級学校への進学を視野に入れた指導も充実させることにしました。そうして、生徒一人ひとりが希望進路を実現できる『進学にも就職にも強い学校』をつくり、地域に一層



岡崎伸一 おかざき しんじ
高知県・高知市立高知商業高校校長
教職歴37年。同校に赴任して38年目。「すべて親心で」（初代校長）生徒に向かい、校是「報本反始」「馳程万里」の精神での学校経営

安岡孝浩 やすおか たかひろ
高知県・高知市立高知商業高校
教職歴20年。同校に赴任して13年目。進路指導部長。「我が子ならばどう手助けするか？」と常に自問しながら、進路指導を行いたい

成瀬孝治 なるせ こうじ
高知県・高知市立高知商業高校
教職歴21年。同校に赴任して22年目。特別活動指導部長。「諦めが限界を生む。時には猪突猛進で」

西岡秀和 にしおか ひでかず
高知県・高知市立高知商業高校
教職歴18年。同校に赴任して14年目。進路指導部長。「若いうちの苦労は買ってでもせよ」生徒とともに成長を続ける教師でありたい

安岡浩二 やすおか こうじ
高知県・高知市立高知商業高校
教職歴14年。同校に赴任して7年目。進路指導部長。総合マネジメント科特進コース長。「物事の背景に目を向けられる生徒を育てたい」

森本堅祐 もりもと けんすけ
高知県・高知市立高知商業高校
教職歴13年。同校に赴任して9年目。進路指導部長。総合マネジメント科特進コース主任。「生徒にとっての最善を考え、接していきたい」

貢献しようと考えました」

学校経営ビジョンを明確化し、 教師・生徒の目線合わせを徹底

最初に取り組んだのは、目指す学校像の共有だ。管理職と進路指導部長・教務部長・商業科長で構成される「学校づくり企画会議」を設置し、年度ごとに「学校経営ビジョン」「重点教育計画」を策定（図1）。学科・コース・校務分掌・教科会ごとに重点教育計画に基づいた指導方針を立て、カリキュラム・マネジメントを推進する体制を整えた。現在では、それらに加えて、「課題発見・課題解決力」「察する力」「失敗から学ぶ力」といった生徒に育みたい6つの資質・能力を整理した「市商マネジメント力」も打ち出し、あらゆる教育活動の指針として位置づけている。「市商マネジメント力」は生徒一人ひとりにも根づいており、生徒自らが部活動の応援などで「市商マネジメント力」6番！（*2）と入れ込むほどだという。

進路指導部では、進路指導・教科指導の方針の統一を図り、まずは全学科で同じ模擬試験を定期的実施することにした。そのねらいを、進路指導部の安岡浩二先生は次のように話す。

「生徒の基礎学力の定着度を把握し、普通高校と同じ意識で指導できるよう、一般教科・科目の到達目標は『模擬試験の偏差値50以上』と設定しました。具体的な数値を示せば、各教科担当の教師はその達成を自分事と

して捉えやすくなり、指導改善につながるという思いもありました」

学科間の連携強化にも力を入れ、全学科の学年主任を進路指導部の所属とした。そして、生徒の進路選択が具体化していく2年次の2月以降は、進路指導部の全教師と各学級担任が定期的に集まる「進路検討会」を行うことにした。毎回、生徒一人ひとりについて、評定や模擬試験の成績の推移、希望進路などを確認して指導方針を話し合い、担任の個別指導に反映させる。進路指導部長の安岡孝浩先生は、こう語る。

「安全志向になりがちな生徒にも、目標を高く設定し、挑戦してほしいと思っています。進路検討会の重要な目的は、そうした指導方針を共有し、全学科に浸透させることです。また、第1志望の実現が難しくなった場合も想定し、生徒一人ひとりが納得する進路指導を意識しています」

図1 高知商業高校の目指す学校像

- ◎2018年度学校経営ビジョン
 - 教職員全員が同じ方向を向く時、相乗効果が波及効果が生まれ、生徒が変わる
- ◎2018年度重点教育計画
 - ①ビジネスマナー教育の徹底
 - ②基礎学力向上
 - ③市商マネジメント力の育成
 - ④学びに向かう力の育成
- ◎市商マネジメント力
 - ①コミュニケーション力
 - ②課題発見・課題解決力
 - ③プレゼンテーション力
 - ④ICT活用力&英語活用・表現力
 - ⑤察する力
 - ⑥失敗から学ぶ力

* 学校資料を基に編集部で作成

* 2 6番とは、図1の「市商マネジメント力」の⑥「失敗から学ぶ力」を指す。

同じ目標を抱く生徒を集め、最後まで頑張る意欲を高める

進路意識の向上を目指した取り組みには、2つの柱を設けている。

1つは、国公立大学を志望する全学科の3年生を対象に、4〜12月まで行う「国公立大学対策講座」だ。一般入試や推薦・AO入試の流れを説明し、短期・長期両方の学習計画を考えさせたり、学習意欲を高められるよう、大学の教員や地域の社会人を講師として招き、出前講座をしてもらったりする。ほかに、推薦・AO入試での進学を目指す生徒には、管理職を含む全教師が分担し、面接対策や志望理由書作成のための指導を行う。その取り組みを企画した進路指導部の西岡秀和先生は、次のように述べる。

「国公立大学進学という目標を共有する生徒が集まれば、互いに刺激を受け合えると思いい、そうした機会を定期的に設け、最後まで頑張ろうとする意欲的な集団をつくりたいと考えました。『国公立大学対策講座』に参加する生徒は次第に増え、2018年度は100人を超えました。進路選択に前向きになる生徒が増えるにつれて、全学科の先生方からの協力が一層得やすくなっています」

もう1つは、希望進路を実現した3年生が1・2年生の教室に向き、その進路を選んだ理由、大学受験や就職活動の体験談などを語る「ようこそ先輩」だ。

「進路決定に至るまでの不安や迷いを具体的に挙げながら、『それでも、自分の力を信じて、やりたいことに挑戦してよかった』と述べる3年生が目立ちます。そうして自己実現を果たした3年生の話を聞けば、1・2年生は『自分も頑張ろう』と感じるでしょう。主体的な進路選択への意識づけになると考えています」（西岡先生）

指導のポイントを全教師が共有し、組織的に学力向上対策を推進

学力向上対策としては、日々の授業を充実させられるよう、全学科で指導改善を図っている。その1つが、「主体的・対話的で深い学び」の視点を取り入れたアウトプット中心の授業だ。各教科・科目でグループ学習やプレゼンテーションなど力を入れている。記述を通じた振り返りも重視し、生徒が自己評価をしやすいよう、各授業における評価規準は板書などで明示している。18年度からは、振り返りを始める目安として、授業終了の5分前に予鈴を鳴らすことにした。そうした学校全体で大切にしている指導のポイントは「授業スタンダード」にまとめ（図2）、全教室に掲示している。

一方で、学科・コース独自の取り組みもある。例えば、国公立大学を志望する生徒が多い総合マネジメント科特進コースでは、毎朝10分間の朝学習の時間を設定し、「Class」（*3）で配信する小テストに取り組みさせている。また、同

図2 授業スタンダード（抜粋）

授業規律スタンダード

- 授業者1分前着
- 号令「起立・礼・着席」
- 机の上の教材以外の物を片づけさせる など

授業実践スタンダード

- 本時の生徒の到達目標（具体的なアウトプット）を板書などで明示
- プロセス（発言の質や量などの行動目標）評価の規準を板書などで明示
- ワーク中、積極的にプロセス評価（対話的な学びの促進）を行う
- 振り返り
 - プロセス評価のまとめを行う
 - 板書した本時の生徒の到達目標を振り返る など

* 学校資料を基に編集部で作成

コースでは、18年度の1年生から「大学入学共通テスト」への対応も検討中だ。同コース主任の森本堅祐先生は、自身が担当する地理歴史・公民科の方針についてこう話す。

「同テストの試行調査の問題を見ると、語句から文を選んだり、複数の資料を比較・分析したりする問題が増え、読解力がより求められる傾向にあると思います。そこで、国語科や商業科と連携した授業を考えています」

特別活動における成功体験で、自信を深める生徒たち

同校の指導改善の推進には、生徒会活動や学校行事といった特別活動の支えも大きい。

同校では、ラオスにおける学校建設を支援する国際協力活動を生徒会主体で行うなど、特別活動が伝統的に盛んであり、「市商祭」（文化祭）

* 3 株式会社ベネッセホールディングスとソフトバンク株式会社の合弁会社であるClassi 株式会社が提供する、学校教育でのICT活用を総合的に支援するサービス。

では、毎年、クラスやグループごとに模擬店やダンスのパフォーマンスといった趣向を凝らした企画を行う。特別活動指導部長の成瀬孝治先生は、次のように語る。

「生徒一人ひとりが、クラスメートと力を合わせながら、出し物を練り上げます。思うようにいかないことがあっても、最後まで粘り強く取り組み生徒が目立ちます。そうした経験を積む中で、どの生徒も『やればできる』という自信をつけていくようです」

17年度の市商祭からは、同校が運賃を負担し、路面電車での来校者を増やすという取り組み「電車でも市商祭へGO!」を、地域の鉄道会社やデパートと連携して行っている。それは、来校者用の駐車場の不足という問題を解決するため、生徒会役員やクラス評議員らが自ら立案した企画だ。市商祭の約1か月前からは、PR活動の一環として、イルミネーションを施した路面電車も運行してもらった（写真）。

「そのアイデアが地域で評判になり、17年度の来校者は例年の約1.5倍になりました。盛況を目のあたりにして、生徒は『高校生でも地域や大人を動かせるのだ』と感じたようです。そうした感動が自分の可能性に目を向けるきっかけとなり、積極的にやりたいことに挑戦しようという意欲につながっていると

思います」（成瀬先生）
市商祭や合唱大会といった大規模行事では、各学科の3年生のリーダーが行事の準備・練習



写真 地域の大学や企業と連携する特別活動の企画では、外部との交渉は基本的にすべて生徒が行う。市商祭の「電車でも市商祭へGO!」のPR方法も、生徒が予算も含め総合的に判断しながら鉄道会社と話し合い、路面電車にイルミネーションを施してもらうことにした。

期間中に集まり、毎日の活動を振り返る「リーダー会」を放課後に行う。そこで準備・練習の課題を洗い出し、それを翌日に改善するための計画を「PDCAサイクルシート」に書く。また、生徒会では、自分たちの活動の内容について、市内の全公立中学校の生徒会役員が集まるイベントなど、校外の様々な場で発表する。そうした取り組みの中で得た学びは、日々の授業にも反映されているという。

「行事のリーダーや生徒会役員は、特別活動での経験を生かし、授業で自分の考えを整理して述べ、的確な振り返りを行います。そうした姿から、ほかのクラスメートは刺激を受けるようです。当初は控えめでも、次第に前向きに取り組むようになる生徒が少なくありません。特別活動に意欲的に取り組む生徒が『核』となり、学校全体によい影響を及ぼ

していると感じます」（安岡孝浩先生）
**地域に貢献できる人材育成を
目指し、指導改善を続ける**

一連の取り組みの成果は、進路実績に結びつき、毎年20人以上が国立大学に進学するようになった。高い目標に挑戦しようとする意識の向上は、前述した「国立大学対策講座」に参加する生徒が100人を超えたことからもうかがえる。ほかの進路を選ぶ生徒も、自分のやりたいことに向き合い、結論を出しているという。

「以前と最も大きく異なると感じるのは、卒業式での生徒の表情です。堂々としている生徒が多く、自分で決めた進路への期待感と『3年間、力いっぱい取り組んだ』といった達成感が伝わってきます」（安岡孝浩先生）
そうした生徒の変化を見て、指導改善をさらに進めようとする教師が全学科で増えている。18年度の学校経営ビジョンにうたわれた「相乗効果と波及効果」が、実現していると言える。

今後は、教科指導・進路指導と特別活動のつながりを強めていきたいと、岡崎校長は話す。
「高校卒業後、いったん県外に出た生徒にも、いずれは故郷に帰ってきてほしいと思っています。そこで、地域をテーマにした探究学習と特別活動を融合させるなど、生徒の地域への関心をより高める取り組みを充実させようと計画中です。そうして、地域に貢献できる人材を育てていきたいと考えています」